

てゐた。

奴隸制は、單に奴隸制としてのみならば、其の奴隸の上に於ける共產制（乃至半共產制）の氏族制度の維持と矛盾する者ではない。現今でも、さういふ社會形體の實例は見出だされる。其の場合、奴隸は族、氏、若しくは戸の内部に於ける劣等分子であつて、舊氏族制と舊共產制とは依然として存じてゐた。然るに貨物の交換と貨幣とが働きたすと同時に、破壊は直ちに開始された。私有財産、富の集積、更に多大の富を得んが爲の富の使用、それが避くべからざる進路であつた。次いで各種の方面に於ける労働の分業が起り、多くの場合、農業、工業、商業、船舶業等の間に、嚴重な職業的階級が生じた。實に此の貨幣と商業とは、古代の保守的な社會制度の間を押しわけて、携みなく其の進路を開いて行つた。但し其の歩みはどこでも比較的遅々たるものであつた。次第々々に共產制に取つて代つた個人生産は、若干の奴隸を其の家族の一部として使用しながら、數百年間その方法を持続し、かの組織的大仕掛の奴隸生産が、一層完成せる分業と急速に集積する富とを以て大勢力を揮つて來るのに對抗した。此の發展の史跡はどこに行つても全く同一である。例へば茲に數氏族の定住した一部落があるとする。其の集團の中心は決して地理的關係に在るのでもなく、亦固より土地所有に關係に在るのでもない。彼等は只だ其の血族的關係に依つて結合してゐるのである。之はモルガンが亞米利加印度人の社會組織を研究して、其の結果を古代の社會に適用して、初めて明かになつた所のものである。然るに斯くの如き一部落が漸次に強大となり、外部に於ける不斷的戦闘状態に對して安全を保持する事になれば、元來の民族編制以外に在る多數の人民は續々と

して此の部落の周圍に來り集まる。それと同時に共產制は破れて私有財産制が起る。富、交易、及び商業は頓に發達する。斯くて原住民と血族關係のない人口が増加するに連れ、舊家は貴族となつて高位に立ち、次第に階級制度の形を生じて來る。そして血族關係と財産關係との間に絶えず矛盾撞着を來し、財産と住居地とに基づく革命思想が必然に勝利を占める。即ち財産權と住居權とが人的所有、そして遂に（前にも云ふ通り）土地其者の私有が生産上の主要形式となる。奴隸制は又近隣の諸氏族との争闘に依つて擴大される。戦勝若しくは同盟の結果として、奴隸制は一層有力な生産法となる。戦勝いよいよ多ければ奴隸制いよいよ進み、交換と貨幣とは最大の勢力を揮ひ、階級の分離は固定して一般に承認される。但し奴隸生産と相並んで自由労働は猶ほ存在してゐる。それから、どこでも同じ原因から同じ有様で、單なる生産關係以上に、負債者と債主との大問題が起る。土地財産の私有者が、一時何等かの必要に迫られて金を借れば、忽ち債主の權力内に捕はれて了ふ。此の債主は即ち近世の富豪資本家の直接の先祖である。彼等は大部分、商人及び仲介人であつて、生産者と消費者との間に立ち、兩者の頭を兼ねて金を溜めた者共である。そして彼等は新時代の革命分子として、大抵舊社會と直接の關係を持つてゐないので、其の負債者に對して殘忍を極めてゐた。不幸なる負債者が苛酷なる債主の爲に苦しめられる事實は、古代史の中に充ち満ちてゐる。債務を辨償し得ざる者は、自分も妻も子供も、皆な債主の自由にされ、人情は毫も此の問題に入り來らず、慘酷たる階級争闘が永續された。そこで國家若しくは一般社會は（我々の見地か